

保育に対する保育者の葛藤に関する研究動向

—「身近な人と気持ちを通じ合う」と「人間関係」「言葉」、
「身近なものに関わり感性が育つ」と「環境」「表現」を中心に—

黒木 晶*・前田 亜由美**・坂田 和子***

Research trends on conflict of nursery school and kindergarten teachers
about early childhood care and education Focus on Pre field
“Human relationship” “Language”, Pre field “environment” “expression”

Aki KUROGI, Ayumi MAEDA and Kazuko SAKATA

概要

本研究は、保育者の葛藤に関して、平成29年告示保育所保育指針の乳児保育、3歳未満児保育に関わるねらい及び内容で示されていることと照らし合わせて捉えることを目的とした。「身近な人と気持ちを通じ合う」と領域「人間関係」「言葉」において、保育士は子どもとの信頼関係作りを大切に、関わろうとしているものの、個々での丁寧な関わりとクラス全員をみる必要性での難しさを感じていた。また、言葉が未発達であるが故に起こるかみつきやひっかき等の子どものトラブル対応についての難しさも抱えていた。「身近なものに関わり感性が育つ」と領域「環境」「表現」においては、保育士が安全な環境を保障することや子どもの姿に合わせた環境作りを意識しているものの、月齢差が大きく身体差もある中で、発達の連続性を踏まえ、個々に合わせた遊びを提供することの難しさを抱えていた。

キーワード：乳幼児、人間関係、環境、発達の連続性

1. はじめに

経済協力開発機構（Organisation for Economic Co-operation and Development: OECD）は、1998年に乳幼児期の教育とケア（Early Childhood Education and Care: ECEC）政策を打ち出し、近年、乳幼児期の保育・教育への関心が世界的に高まっている。OECD 調査報告書「人生の始まりこそ力強く」は、幼い子ども特に3歳未満の人生の最初期にある子どもが有能な学習者であること、乳幼児期の学びが生涯学習の基盤となることを報告している（OECD, 2006）。

日本においても、平成29年告示の保育所保育指針に、乳児保育、3歳未満児保育の記載の充実が図られ、乳児期からの保育の重要性が示されている（厚生労働省, 2017）。

3歳未満の子どもが保育を受ける場として保育所や認定こども園があり、2015年4月には子ども・子育て支援新制度が施行され、少人数の単位で0歳から2歳の子どもを保育する事業として地域型保育も展開されている。

このように、特に3歳未満児に対する保育の量的拡充が目指され、保育の場が多様化している中、子どもの育ちを保障する質について求められるようになってきている。しかし、保育の一つ一つの実践は、「一回性」、「不確実性」、「複雑性」、「曖昧性」という性質があり、簡単に行うことができるものではないことが指摘されている（矢藤, 2017）。

また、秋田（2000）によると、保育は、「①異質な他者としての子ども理解のむずかしさ、②応答性や無限定性を伴うケアという行為のむずかしさ、③子どもをとりまく他の大人たちとの関係作りの中で私らしい保育、保育者としての自分を創っていくむずかしさ」の3つの困難を内包している。このように、保育は子どもの一つ一つの発達について喜び合うと同時に、適切な発達を保障するなどの保育の専門的支援を行い、どちらも大切にしながら常に考え続ける難しさがあり、保育者はその難しさの中で葛藤している可能性がある。

保育所保育の中でも、3歳未満児の保育は特に、基本的な生活習慣（食事、排泄、睡眠等）について一人一人

* 福岡女学院大学大学院

** 大和保育所

*** 福岡女学院大学

の状態に応じることや基本的信頼感を築くこと、安全面に気を配ることが重要であり、保育士の援助が必要になる。また、子どもは園の環境に置かれたものと出会い、そこから自分でできることを探し、取り組み、学んでいく（無藤，2007）。そのため、保育士は子どもの姿に応じて日々の保育を行い、月齢差に合わせた関わりや環境構成をすることが求められる。

本研究では、保育者の葛藤に関する研究や、3歳未満児クラスを担当する保育士の葛藤について、平成29年告示の保育所保育指針第2章保育の内容、乳児保育、3歳未満児保育に関わるねらいおよび内容の「身近な人と気持ちを通じ合う」と領域「人間関係」「言葉」、「身近なもの」と関わり感性が育つ」と領域「環境」「表現」の視点で整理することを目的とする。

2. 保育者の葛藤

渡辺（2006）は、幼稚園における保育者の葛藤を、集団と個に関わる保育の特徴から、集団と個のどちらも重要なため、バランスよく両者を満たしたいと考えて生じる関係論として捉え、「保育集団というシステムにおいて、子どもの自主性を重んじつつ、保育者がクラス全体を把握することと、個々への援助に優先順位をつけ、関わることを同時に行う過程で生ずる保育者の援助の適切さや適時性に関する判断が十分に行われていないとされている心の状態」と定義している。また、保育教諭養成課程研究会（2016）は、幼稚園、認定こども園の新規採用教員が抱えている課題を不安、悩み、葛藤の3つに分類し、葛藤を「心の中に相反する動機・欲求・感情などが存在し、そのいずれかをとるか迷うこと」と定義している。保育教諭養成課程研究会（2016）によれば、新規採用教員は、先輩教員の子どもの関わりや遊びの指導をみて、自分もそのようにしたい理想とうまくいかない現実の間で葛藤が起きる。また、教育・保育の経験がある新規採用教員に関しては、新しい環境の中で、これまで身に付けてきた「幼児の発達の理解」と現在の幼稚園の考え方や幼児教育の考え方の間で葛藤が生まれている。

保育者の職務上の困難感としては、「保育の困難感」「仕事の大変さ」「人間関係の困難感」「職員間の理解不足」「仕事のやり甲斐のなさ」「業務負担」がある（加藤・安藤，2013）。

また、幼稚園教諭の精神的健康は、ストレス因子「園内の人間関係の問題」及び「仕事の多さと時間の欠如」によって規定され、「子ども理解・対応の難しさ」と「学級経営の難しさ」は精神的健康を害するものではない（西坂，2002）。保育職の大変さは、保育の実施に関する負担や、職場や保護者との人間関係、保育以外の事務的な作業、労働環境等の自分ではどうすることもできない状況下にある場合に意識化される（金城・安見・中田，2011）。

赤田（2010）は、保育職という専門性を考慮し、保育士全体に測定できる尺度として、保育士ストレス評定尺度（Nursery Teacher's Stress Scale: 以下 NTSS とする）を作成している。NTSS は、「子ども対応・理解のストレス」、「職場人間関係のストレス」、「保護者対応のストレス」、「時間の欠如によるストレス」、「給料待遇のストレス」、「保育所方針とのズレによるストレス」の6因子で構成されている。

保育者は、子ども理解について、また職場内の人間関係、保育業務の多さ等について困難を抱えており、その中には、自分ではどうすることもできないものと、自分の見方次第で変えることが可能なものが含まれている。

3. 3歳未満児を担当する保育士の葛藤

(1) 「身近な人と気持ちを通じ合う」と「人間関係」「言葉」を中心とした保育士の葛藤

「身近な人と気持ちを通じ合う」は、「受容的・応答的な関わりの中で、何かを伝えようとする意欲や身近な大人との信頼関係を育て、人と関わる力の基盤を培う」ものとされている。また、「人間関係」は、「他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人と関わる力を養う」もの、「言葉」は「経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。」ものである。

保育士は、子どもと保育士の間に信頼関係を築くことを重要としている中、目の前の子どもに今必要なかわりを認識しながら、現実的にはかなわないという十分な保育ができないことや、個別のケアが必要な状態があると、1対1と1対その他大勢という状況が生まれること等難しさを感じている（古賀，2011）。また、低年齢になればなるほど言葉を介した言語的コミュニケーションが難しく、子どもの泣きをどう理解するかという点で保育士は難しさを抱えている（入江，2013）。また、入江（2013）は、新人保育士が子どもの気持ちを切り替える方法や、子どもへの言葉かけ、関わり方のバリエーションが少なく、対応の難しさがあることを示している。これらは、保育士が子どもの多様な感情を受け止め、温かく受容的・応答的に関わることの大切さを理解しながらも、実際に目の前の子どもと関わる際にうまくいかない状況があることを示唆している。

さらに、3歳未満児クラスでは、子どもの言葉が未発達であるために自分の思いを上手く伝えることができず、かみつきやひっかきのトラブルが起こることもあり、保育士は対応に難しさを感じている（古賀，2011）。保育士は、子どもが身近な人に親しみをもって接し、自分の感情などを表し、それに相手が応答する言葉を聞くことを通して、次第に言葉が獲得されていくことを考慮することが求められる。子どもを理解し、ゆっくり一人一人と関わる時間を確保することが難しい中でも、担任間

で連携をとる工夫が必要となる。

(2) 「身近なものに関わり感性が育つ」と「環境」「表現」を中心とした保育士の葛藤

「身近なものに関わり感性が育つ」は「身近な環境に興味や好奇心をもって関わり、感じたことや考えたことを表現する力の基盤を培う」ものとされている。また、「環境」は「周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う」もの、「表現」は「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」ものである。

村上・汐見・志村・松永・保坂・富山(2008)は、乳児保育室の空間構成に注目し、単一空間の保育室をコーナー(畳、じゅうたん、静的休息型ブース、動的遊戯型ブース、フローリング)から成る部屋へ構成したことで、新たな子どもの行為が引き出されたことを明らかにしている。このことは、環境によりつかむ、つまむ、たたく、引っ張るなどの行為が引き出される可能性や、子ども自らが興味や好奇心をもつことができるような環境の重要性を示唆すると同時に、保育者が、保育室の環境をどのように構成すればよいか考え実践することの難しさを感じていることを表している。

一方、近藤・定行(2012)は、0歳児の発達と保育室の使われ方に着目して観察調査し、0歳児の保育室には、主な移動を歩行で行う「歩行児」、ほふくで行う「ほふく児」、ほふく前の段階の「ほふく前児」が混在していることを明らかにしている。また、近藤ら(2012)は、保育室には、食事スペース、午睡スペース、遊びスペースがあり、中でも遊びスペースは一日を通して使われること、生活リズムの個人差が大きい場合ほど、複数のスペースが同時に使われ、かつその時間が長いことを明らかにしている。保育士は、子ども達の発達や状況に合わせて、一日の保育の中でも柔軟に環境構成をすることや変更することが求められるのである。

3歳未満児の保育室において阿部(2004)は、生活に必要な家具などを使って仕切り、小さな空間をつくり出している保育室と、保育室を区切らず中央を広く開けている保育室での保育室の在り方について検討している。保育室を区切る場合は、区切られた小さな空間に寝る場所、食べる場所、遊ぶ場所というようにその場の意味を持たせて、ある程度持続的に、同じ意味が繰り返され生活することになる。保育室を区切らない場合は、広い空間の中でその空間が、食事の場になったりする多目的な場に変化するところで、その場その場の意味に沿って生活することになる。前者は、子どもが子どもの生活をするところに重点を置き、子どもの主体性の視点に立った考え方で、後者は安全第一を重視する環境構成である(阿部, 2004)。いずれにしても、保育士は安全な環境の下で子どもが過ごせるようにすることを考慮している。

さらに、阿部(2004)は、ほとんどの保育士は、保育室を区切ることを理想としているものの、実際には、保育室を区切っている保育所と区切っていない保育所があることも明らかにしており、理想と現実での難しさ、また環境構成することの難しさを感じていることが窺える。

また、保育士は子どもの月齢により、歩行の完成、遊びの内容、生活面での自立、生活リズム、自我の芽生え等様々な面で大きな違いがあることの月齢による発達差や、子どもが集まって一緒に遊ぶのではなく、個々に興味をもった遊びをするという個々の遊びの多さ、身体的な発達差が大きく、安全な保育環境の保障をすることの難しさを感じている(古賀, 2011)。古賀(2011)は、途中入所や混合保育によって個々の気持ちが発達差にふさわしい環境保障が難しくなることも示している。これは、安全な保育環境を提供しながら月齢幅のある子ども達一人一人に合わせ、音質、形、色、大きさなどを考慮した玩具を選ぶことの難しさを含んでいると考えられる。加えて、古賀(2011)は、低月齢児と高月齢児の発達を促す安全な環境を提供することの難しさや、自我が芽生え、個々の興味に従って動く子どもに対応する際に感じられる探索活動・自我の芽生えと保育士不足感があることが示されている。これらにより、保育士は子どもの月齢差や個人差がある中で、子ども一人一人が身の回りのものに親しみ、触れ合う中で、様々なものに興味や好奇心をもつことや、自分から探索し、様々なものに関わり発見することにつながるよう環境構成し、実践していく難しさを感じていることが予想される。加えて、保育所保育士配置基準の保育士の人数で子どもを十分にみることができないという難しさの中で、保育士は葛藤しながら保育の工夫をしているのであろう。

4. まとめ

本研究では、保育者の葛藤、3歳未満児クラスを担当する保育士の葛藤について、「身近な人と気持ちが通じ合う」「身近なものに関わり感性が育つ」を中心にして概観した。

まず、保育者は、子ども理解や対応、職場内の人間関係、保育の仕事の多さ、給料等処遇面等についての葛藤を抱えていることを整理した。さらに、葛藤には、自分ではどうすることもできないものと、自分の見方次第で変えることが可能なものが含まれていた。

乳児保育、3歳未満児保育に関わるにねらい及び内容については、「受容的・応答的な関わりの下で、何かを伝えようとする意欲や身近な大人との信頼関係を育て、人と関わる力の基盤を培う」ために、保育士は子どもとの信頼関係作りを大切に、関わろうとしているものの、個々での丁寧な関わりとクラス全員をみる必要性があることの難しさを感じていた。また、かみつきやひっかきのトラブルが起こることもあり、保育士は、「子どもが身近な人に親しみをもって接し、自分の感情などを表し、

それに相手が応答する言葉を聞くことを通して、次第に言葉が獲得されていくこと」を考慮することの難しさを抱えていた。

「身近な環境に興味や好奇心をもって関わり、感じたことや考えたことを表現する力の基盤を培う」ためには、月齢差や個人差を考慮し、発達の連続性を踏まえた環境構成が求められるが、保育士は実際にどのような環境構成にするのか考え実践することについての難しさを抱えていた。つかむ、つまむ、たたく、引っ張るなどの行為を引き出す環境を考える際、子どもの運動発達を把握し、様々な素材や形、大きさ、色など子どもに合わせた玩具を準備することが必要であると考えられる。その際、一つのもので何通りもの遊びができ、子どもの姿に合わせて考えることができる手作りおもちゃを取り入れることは有用であろう。

また、温かな雰囲気の中でわらべうた等、子どもとのゆったりとした時間があることが理想である。加えて、クラス内の保育士が連携して保育することは必要不可欠であると考えられる。

3歳未満児の中でも、乳児（0歳児）が、他の年齢より運動発達面や言語面での月齢差や発達差が大きく、養護面での個々への関わりも月齢差や発達差において多様である。本研究動向は、子どもの発達と保育士の葛藤の相互作用の中で展開される保育について、保育内容の観点から整理することで子どもと保育者の生活が営まれる場を具体的に検討できる可能性を示唆している。

引用文献

- 1) 阿部和子 (2004). 乳児保育再考Ⅵ—3歳未満児の保育室の在り方を考える— 聖徳大学研究紀要短期大学部, 37, 39-46.
- 2) 赤田太郎 (2010). 保育士ストレス評定尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 81(2), 158-166.
- 3) 秋田喜代美 (2000). 保育者のライフステージと危機 発達, 21 (83), 48-52.
- 4) 保育教諭養成課程研究会 (2016). 幼稚園教諭・保育教諭のための研修ガイドⅡ—養成から現職への学びの連続性を踏まえた新規採用教員研修— 文部科学省委託「幼児教育の質向上に係る推進体制等の構築モデル事業」
(http://youseikatei.com/pdf/20160202_2.pdf) (2017年11月10日)
- 5) 入江慶太 (2013). 新人保育士が感じる保育の難しさとは何か—3歳未満児クラスにおける検討— 川崎医療短期大学紀要, 33, 61-67.
- 6) 加藤由美・安藤美華代 (2013). 新任保育者の抱える職務上の困難感の要因に関する研究—新任保育者と中堅・ベテラン保育者および園長との比較— 岡山大学大学院教育学研究科研究集録, 154, 15-23.
- 7) 金城悟・安見克夫・中田英雄 (2011). 保育職の大変さとやりがいに関する保育者の意識構造について—M-GTAによる分析の試み— 東京成徳短期大学紀要, 44, 25-44.
- 8) 古賀松香 (2011). 1歳児保育の難しさとは何か 保育学研究, 49(3), 248-259.
- 9) 近藤ふみ・定行まり子 (2012). 一年をとおした0歳児の発達と保育室の使われ方の関係 日本女子大学紀要 家政学部, 59, 51-59.
- 10) 厚生労働省 (2017). 保育所保育指針
(<http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000160000.pdf>) (2017年11月10日)
- 11) 村上博文・汐見稔幸・志村洋子・松永静子・保坂佳一・富山大士 (2008). 乳児保育室の空間構成と保育及び子どもの行動の変化—「活動空間」に注目して— こども環境学研究, 3 (3), 28-33.
- 12) 無藤隆 (2007). 幼児教育の基本 無藤隆 (監修) 福元真由美 (編) 事例で学ぶ保育内容〈領域〉環境 萌文書林.
- 13) 西坂小百合 (2002). 幼稚園教諭の精神的健康に及ぼすストレス、ハーディネス、保育者効力感の影響 教育心理学研究, 50 (3), 283-290.
- 14) OECD (2006). Starting Strong II Early Childhood Education and Care. OECD Publishing Paris. (星三和子・首藤美香子・大和洋子・一見真理子 (訳) (2011). OECD 保育白書 人生の始まりこそ力強く—乳幼児期の教育とケア (ECEC) の国際比較— 明石書店.
- 15) 渡辺桜 (2006). 4歳児I期の保育における保育者の「葛藤」に関する研究—保育者の思いと実際の保育との調整過程に着目して— 家庭教育研究所紀要, 28, 5-15.
- 16) 矢藤誠慈郎 (2017). 保育の質を高めるチームづくり—園と保育者の成長を支える— わかば社.